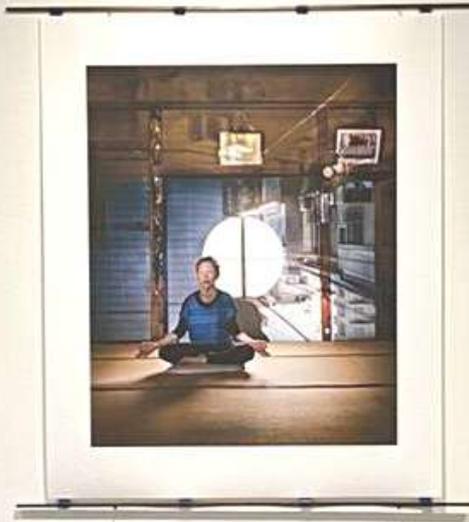




Finnish Institute in Japan
フィンランドセンター



フィンランドセンター
年次報告 2021



4月には所要5時間の編み物マラソンをメツァ・パビリオンでの対面とオンラインのハイブリッド形式にて開催（写真：フィンランドセンター）



メツァ・パビリオンで開催された女性社会進出セミナーを熱心に聴講する参加者（写真：フィンランドセンター）

目次

所長ご挨拶	4
コミュニケーション	5
学術プログラム その中核は新たな研究プロジェクト、持続可能な発展、高齢化、平等の促進	8
文化プログラム	12
高等教育分野における協力	15
編み物クラブ（オンペルセウラ）	17
Hallå Tokyo! スウェーデン系フィンランド人文化ウィーク	18
フィンランドセンター職員紹介	19
謝辞	20



2021年6月9日、オーランド諸島自治記念日にオーランド諸島のシンボルカラーの花を配るフィンランドセンター所長
アンナ=マリア・ウィルヤネン（写真：フィンランドセンター）

所長ご挨拶

感染症の世界的流行という困難な状況下、日本への入国が依然として制限される中であっても、新たな学際的研究プロジェクト、日本の大学とのさらに緊密な協力関係、多角的・多面的な文化プロジェクトが実現

危機的状況下では、活動の有効性と職員の柔軟性、そしてリーダーシップが試されます。感染症の世界的流行が続く中、フィンランドセンターは、終わりの見えない例外的状況に適応する強さと能力を示しました。職員の健康と気力を支えたのは、前年度に始めた毎日のバーチャル・コーヒータイムです。この時間には、チームメンバーの仕事を確認するだけでなく、不安定な状況でひとりひとりが抱えている思いや心配事に耳を傾けました。

2021年度のプログラムとしては当初、日本への入国制限が解除されることを期待し、非常に意欲的なものを設定していました。しかし期待は実現しませんでした。日本への入国は年間を通して制限されたままとなり、少人数での会合も、開催を制限され厳密な規制を受けることとなりました。

学術プロジェクト

当センターは学術関連の活動に引き続き注力しています。すでに進行中の、グスタフ・ヨン・ラムステッド（1873～1950）の日本におけるネットワークに関する研究に加え、新たに3年計画の研究プロジェクトの準備を早稲田大学と共同で開始しました。この研究の中心テーマは、フィンランドの芸術家の家、その日本の山荘との比較、地理的条件、場の神話、自然との関係、それらが芸術創作プロセスに与える影響です。

オンラインで実施した日本の大学への「ロードショー」も、学術プログラムを補強するものとなりました。「ロードショー」の目的は、日本とフィンランドの大学間の協力体制を強化することです。大学との協力の成果として、当センター所長が武蔵野美術大学に講師として招かれました。当センターはほかにも、フィンランドの学術機関が共同で実施した「Beyond Populism」レクチャーシリーズに参加しました。また、LIKES（身体活動健康研究センター）と共同で「スクール・オン・ザ・ムーブ」パイロット・プロジェクトに参画し、その第一段階が好結果を得ました。

文化

多彩な文化プログラムを実施しました。例として次のようなものが挙げられます：早稲田大学・渡邊大志准教授の展覧会「ひとつなぎの建築 Unity Architecture in Finland and Japan」、写真家マルヤ・ピリラと日本人陶芸家デュオ Satoko Sai + Tomoko Kurahara（崔聡子と蔵原智子）による展覧会「インナー・ランドスケープス、トーキョー」、ミーラ・ウェスティンの「ミシカル（神話）」展、ヘルシンキのLOKAL Galleriaで開催された信楽焼の展覧会など。これらに加え、人気のイベント「編み物クラブ（オンペルセウラ）」の集いや、多面的な「Hallå Tokyo! スウェーデン系フィンランド人文化ウィーク」も開催しました。

国内外での協力

当センターはEUNIC JAPAN（欧州連合文化機関）の一員として、多くのイベントに参加しました。東京パラリンピック開催に合わせた写真展「Spirit in Motion for Diversity & Inclusion」、読書の大切さを強調する「Europe Readr」プロジェクト、ヨーロッパ文芸フェスティバルなどがその例です。

駐日フィンランド大使館、ビジネス・フィンランド、在日フィンランド商工会議所（FCCJ）と当センターによるチーム・フィンランドの協働は、緊密な形で継続しています。協力をより深めるため、短期・長期展望の発展計画を作成しました。

当センターを含むフィンランドの文化・学術機関の相互協力により2020年に開始した「Together Alone」プロジェクトは、引き続き実施しています。公募を通じて8件の新規企画が選ばれ、選考結果は2021年末にインターネット上で発表されました。

フィンランドセンターでは、日本とフィンランド間の学術・文化・高等教育に関する協力体制に資するため、長期展望の活動に、一心に取り組んでおります。しかしながら、高く掲げた目標は、外部の皆様のご支援ご指導なくして達成することはできません。当センターを代表し、本年度にご協力、ご支援いただいた皆様に心より感謝申し上げます。皆様からの確かなご支援と励ましを力に、意欲をもって設定した目標の達成に向け——学術・文化・高等教育関係の協力におけるエキスパートとして持続的に——共に、未来を信じ、皆様のお声に耳を傾けながら、今後とも当センターの活動に邁進して参ります。

フィンランドセンター所長
アンナ＝マリア・ウィルヤネン

コミュニケーション

フォロワー数：



フォロワー増加率
(前年比)：



メディア取材・掲載例：

埼玉県飯能市 ローカルテレビ局
雑誌「毛糸だま」(日本ヴォーグ社)
Nyå Åland紙(フィンランド地方紙)
Ålandstidningen紙(フィンランド地方紙)

Stort intresse för Åland 100 i Tokyo

Ålands självstyrelsedag firades i går i Tokyo, med utdelning av blommor och informationsblad om Åland. Firandet av Åland 100 kommer att pågå under hela året.

– Folk är jätteintresserade, säger Anna-Maria Wiljanen, direktör för Finlands Institut i Japan.

Japans institut i Finland har massvis med planer inför Ålands hundraårsjubileum. Varje månad fram tills nästa års självstyrelsedag kommer de att ha åtminstone ett evenemang kopplat till Åland.

I går på Ålands självstyrelsedag inleddes firandet, då Finlands Institut i Tokyo delade ut blommor i Ålands flaggas färger och hattformade informationsblad.

– Inom 53 minuter var allt borta! Säger Anna-Maria Wiljanen.

Hon är nöjd med hur evenemanget gick, trots att det inte var helt lätt att få tillstånd.

– Allt är väldigt byråkratiskt här, och man kan absolut inte dela ut blommor var som helst. Till slut fick vi vara vid en supermarket som ligger nära institutet, och kunde dela ut blommorna och hattarna till människorna som gick förbi.

Många av de som tog emot informationsbladen och blommorna blev intresserade och frågade Finska Institutet om mer information om Åland.

– En japanska som kan svenska har mailat mig nu i efterhand. Hon berättade att hon blev rörd av initiativet och tackade för den vackra blomman!

Många kopplingar till Åland

Detta är inte första gången Finska Institutet i Japan uppmärksammar Åland.

– Vi har en stickningsklubb där jag många gånger har berättat om Åland, Kobbå Klintar, och förstas Önningeby.

Institutets stora uppmärksammande av Åland 100 beror



I går på Ålands självstyrelsedag delade Finlands Institut i Tokyo ut blommor i Ålands flaggas färger och hattformade informationsblad. "Inom 53 minuter var allt borta"! Säger Anna-Maria Wiljanen.



delvis på att de just nu håller på att forska om Gustaf John Ramstedt, som var den första finländska ambassadören i Japan.

– Han hade en ganska viktig roll i Ålandsfrågan, och gav en utredning om det till den japanska delegationen. Han gjorde sitt yttersta för att Finland skulle vinna över Sverige.

Anna-Maria Wiljanen har dessutom flera personliga kopplingar till åarna. Dels är hennes man ålänning, och dels skrev hon sin doktorsavhandling om Önningeby konstnärskoloni.

I juli ska Anna-Maria Wiljanen med familj själv åka till Åland, och kommer då fortsätta att fira jubileumsåret genom ett zoom-

möte för dem som är intresserade.

– Just nu kan japanerna själva inte resa på grund av coronapandemin, så de tycker att det ska bli väldigt roligt.

Tilda Lindén



日本・フィンランド両国でフィンランドセンターのイベントがメディアの注目を集めました。

上：オーランド諸島自治100周年記念イベントがÅlandstidningen紙で取り上げられました。

中：編み物クラブ（オンベルセウラ）が日本ヴォーグ社発行の雑誌「毛糸だま」で紹介されました。

下：ペッカ・オルパナ駐日フィンランド大使とフィンランドセンター所長アンナ=マリア・ウィルヤネンの飯能市訪問を地元のテレビ局が報じました。

(写真：フィンランドセンター)

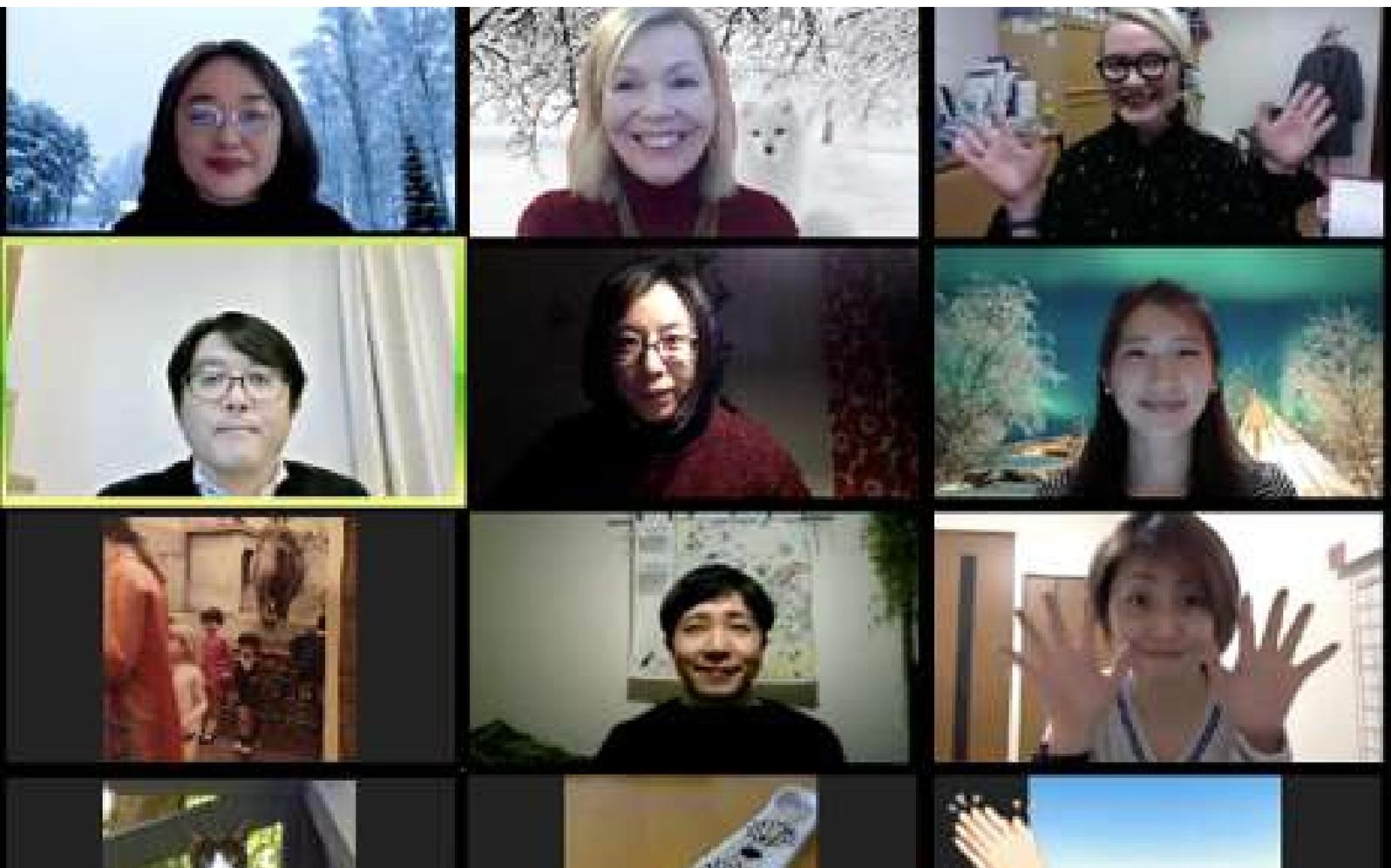




フィンランドセンターは早稲田大学と共同で、日本の山荘とフィンランドの芸術家の家に関する研究プロジェクトを新たに開始しました。（写真：フィンランドセンター）



ラムステッド研究の一環で、フィンランドセンター所長アンナ＝マリア・ウィルヤネンが研究者のテロ・サロマー氏にお会いしました。（写真：フィンランドセンター）



「フィンランドのメンタルヘルス・オンラインセミナー」を、Mieli フィンランドメンタルヘルス協会ならびに株式会社アサヒトラベルインターナショナルとの共催により開催しました。（写真：フィンランドセンター）

学術プログラム その中核は新たな研究プロジェクト、持続可能な発展、高齢化、平等の促進

本年度、フィンランドセンターと日本の大学との協力体制は以前よりさらに緊密なものとなりました。例として、早稲田大学准教授との新たな共同研究プロジェクト、当センター所長の武蔵野美術大学講師としての活動などが挙げられます。

当センターは、学術プログラムの枠で国際コンフェレンスやセミナーを開催しています。テーマとしては、当センターの戦略に沿った、日本ならびにフィンランドの社会に関するトピックを取り上げます。本年度のテーマは、社会・環境・文化の変容プロセス——ウェル・ビーイング、女性の地位向上と平等の促進、人口高齢化でした。また当センターでは、独自の研究、レポート作成、講義の実施、学術コンフェレンスやイベントへの参加、学術に関するさまざまな問い合わせに対する専門家の視点からの回答も行っています。

本年度は日本への入国が制限されていたため、大規模な国際コンフェレンスやセミナーは、移動制限の解除を期待しつつ延期せざるを得ませんでした。学術イベントは主にオンラインで開催しましたが、ハイブリッド形式のイベントも年度内にいくつか実施しています。これは、日本政府が会合を厳しく制限する中で、日本の聴衆が参加可能な形式でした。人工知能と芸術に関するセミナーは、2022年に延期となりました。

「女性社会進出セミナー～女性たちへ、夢見ることをやめて、行動を起こしましょう！
人生の舵取りのための女性のエンパワーメント～」 2021年12月13日開催

当センターは新たに、学際的な研究プロジェクト「フィンランドのアーティスト・コロニーと日本の近代山荘の研究—ナショナルロマンチズムと自然との共生を通じた類似性—」を開始しました。3年に及ぶ本プロジェクトは早稲田大学との共同研究により実施します。ほかに、フィンランドの初代駐日公使グスタフ・ヨン・ラムステッド（1873～1950）のネットワークに関する研究も継続しており、2022年末に完了の予定です。

当センターでは、日本の大学との協力関係のさらなる緊密化を図りました。当センター所長が武蔵野美術大学に招かれて講師を務めたことはその成果です。



高齢化社会セミナー「Aging and Loneliness」で講演する研究者の豊島彩氏。（写真：フィンランドセンター）



高齢化社会セミナー「Aging and Loneliness」で講演する近藤克則教授。（写真：フィンランドセンター）

高齢化社会セミナー「Aging and Loneliness」のテーマは非常にタイムリーでした。感染症の世界的流行が、高齢者の他者からの隔絶や、以前よりさらに深い孤独を引き起こしたからです。セミナーの登壇者には、京都大学大学院特別研究員・豊島彩氏、千葉大学教授・近藤克則氏、東フィンランド大学助教エリサ・ティエリカイネン氏、フィンランド高齢者福祉協会アヌ・ヤンソン氏を招きました。

前年度に当センターが開催した、持続可能な素材のイノベーションをテーマとするセミナーの第二弾が、本年度11月25日に実施されました。北欧のすべての国の大使館と当センター共催の「ノルディック・トークス」セミナーがそれに当たります。本セミナーのテーマは「循環型経済とテキスタイル業界：ファッションにおけるSDG#12」。登壇者は水野大二郎教授、Gisle Mariani Mardai 氏、入山りこ氏、さらに当センターがアアルト大学のピリヨ・カーライネン教授を招聘しました。

当センターでは、日本における女性の社会的地位の向上を目指す長期プロジェクトを本年度も継続しました。このテーマについて当センター所長が多数の講演を実施。2021年2月1日、北陸経済連合会の招きに応じ「女性は世界最大の未開発の才能の宝庫！～フィンランド式！女性の働き方と意思決定に参画させる方法～」と題して講演したのはその一例です。

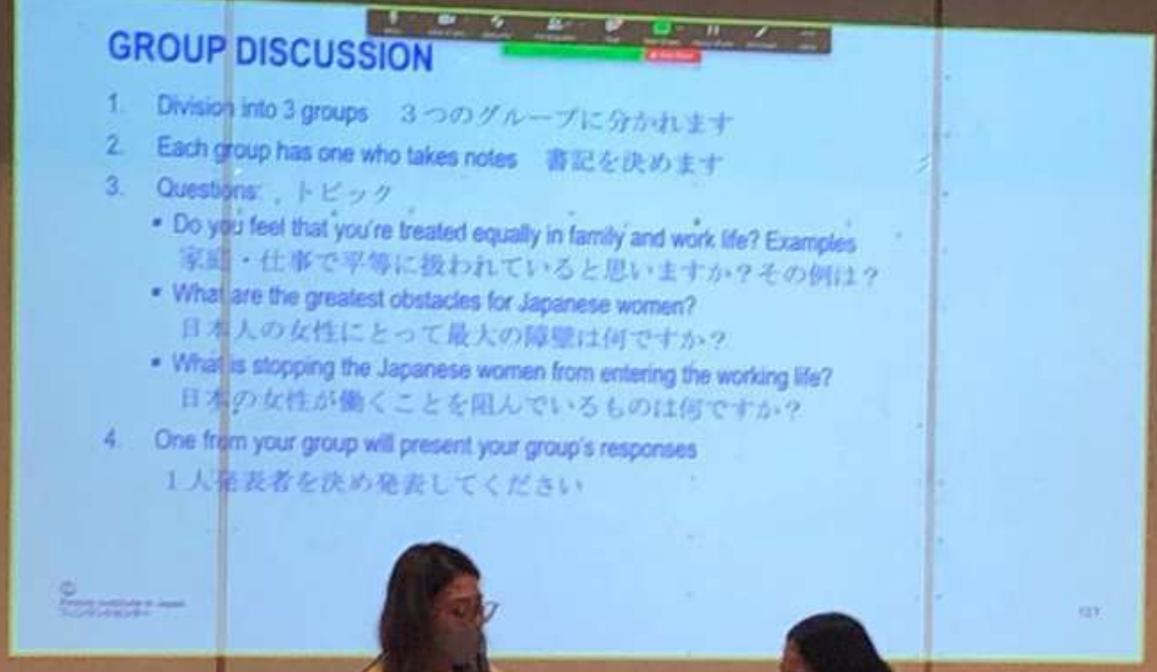
高齢化社会セミナー「Aging and Loneliness」 2021年10月27日開催

12月13日には「女性社会進出セミナー～女性たちへ、夢見ることをやめて、行動を起こしましょう！ 人生の舵取りのための女性のエンパワーメント～」をメツァ・パビリオンにて開催しました。登壇者のうち、猪狩順子氏と美甘小竹氏は、育児休暇後などの仕事への復帰に際し日本の女性が直面する問題について講演しました。

オーランド諸島自治100周年を祝し、「オーランド100」プログラムを実施しました。包括的な本プログラムの目的は、オーランド諸島とその自治モデル、ビジネスや文化活動に関する情報を日本の人々に提供することです。プログラムはオーランド諸島自治記念日である6月9日に幕を開け、この日は当センターがオーランド諸島のシンボルカラーの花を配りました。秋には、金融、海運業、オーランド商工会議所の未来への展望などに関するレクチャーを実施しました。当センターの「オーランド100」プログラムは2022年も継続します。



北欧各国の大使館との共催により「ノルディック・トークス」セミナーをメツァ・パビリオンにて開催しました。
(写真：フィンランドセンター)



GROUP DISCUSSION

1. Division into 3 groups 3つのグループに分かれます
2. Each group has one who takes notes 書記を決めます
3. Questions: トピック
 - Do you feel that you're treated equally in family and work life? Examples 家庭・仕事で平等に扱われていると思いますか? その例は?
 - What are the greatest obstacles for Japanese women? 日本人の女性にとって最大の障壁は何ですか?
 - What is stopping the Japanese women from entering the working life? 日本の女性が働くことを阻んでいるものは何ですか?
4. One from your group will present your group's responses 1人発表者を決め発表してください

「女性社会進出セミナー～女性たちへ、夢見ることをやめて、行動を起こしましょう! 人生の舵取りのための女性のエンパワーメント～」におけるグループ討論の成果発表の様子。(写真：フィンランドセンター)

Sensory Art Journey
Finland × Japan



上段左：ヘルシンキと東京で同時開催されたワークショップ「Sensory Art Journey」で完成した作品。（写真：フィンランドセンター）
上段右：021年6月、「Shigaraki 信楽」展（於 LOKAL Galleria／ヘルシンキ）で展示された福岡佑梨氏の作品。（写真：フィンランドセンター）



4～5月には、梶原サツラ氏を講師に迎え、フィンランドのフォークダンス講座をメツァ・パビリオンの屋外デッキで開催しました。（写真：フィンランドセンター）

文化プログラム

2021年にフィンランドセンターが主催・共催・後援した文化プログラムは34件を数えます。加えて、編み物クラブ、オンラインイベントKAL（Knit Along）、フィンランド語講座、スウェーデン系フィンランド人文化ウィークを開催しました。

イベント

1月に日本国内で緊急事態宣言が発出されたため、2021年の初めに予定されていた文化イベントは幾度も延期を余儀なくされました。写真家マルヤ・ピリラと日本人陶芸家デュオ Satoko Sai + Tomoko Kurahara（崔聡子と蔵原智子）による展覧会「インナー・ランドスケープス、トーキョー」は、当初、東京渋谷公園通りギャラリーで2月に開幕の予定でしたが、開催が実現したのは4月になってからです。同展覧会はまた、一時的な休止にも追い込まれました。

イラストレーター、ミーラ・ウェスティンの「ミシカル（神話）」展は、東京都立中央図書館の企画展示室を会場に開幕しましたが、同図書館が東京都の緊急事態宣言のため休館になるまでの、わずか数日間の展示となりました。展覧会はインターネット上で継続され、ウェスティン氏はオンライン配信で日本人参加者向けに自身の作品を語るトークを行いました。

4月に状況が改善すると、一般向けイベントの再開が可能になりました。梶原サツラ氏が前年に続き講師を務めるフィンランドのフォークダンス講座（全4回）を、メツァ・パビリオンにて実施しました。

ワークショップ「Sensory Art Journey」は、吉田真理子氏のプロデュースにより、東京とヘルシンキで同時開催されたイベントです。ワークショップの1回目では、いずれもアーティストの田中紗樹氏とサンナ・カナンオヤ氏が、それぞれの国で参加者のグループを率い、自然の中での散策を実施。両国のグループはZoomで交流済みでした。参加者は、自然から得たインスピレーションをもとに絵を描き、その半分を相手の国へ郵送。ワークショップの2回目で、自分たちの絵と相手の国から送られてきた絵を組み合わせ、ひとつの作品を完成させました。コラボレーション作品はヘルシンキのディドリシュセン美術館に展示され、日本の参加者はバーチャルツアーによって同美術館を訪れる機会を得ました。

当センターは、滋賀県立陶芸の森とすでに数年にわたって提携関係にあり、レジデンス・プログラムを実施しています。共同事業の一環として、当センターはヘルシンキのLOCAL Galleriaを会場に陶芸展「Shigaraki 信楽」を開催しました。出展者として、信楽のレジデンス（創作研究館）に滞在経験のある日本・フィンランド両国のアーティストが選ばれました。出展者は、福岡佑梨、橋本知成、マティアス・カルシカス、金理有、今野朋子、エーミル・リューティッカ、エリン・ターコール、マン・ヤウの各氏です。本展のキュレーションは、滋賀県立陶芸の元事務局次長(技術)(兼)創作研修課長、杉山道夫氏が手掛けました。

当センターはEUNIC JAPAN（欧州連合文化機関）の一員として、東京パラリンピック開催に合わせた写真展「Spirit in Motion for Diversity & Inclusion」の企画に参加しました。本展は、東京都、日本パラリンピック委員会、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会などとの協働により実現したものです。フィンランドを代表して、写真家ミーッカ・キミンキが撮影した、車いす陸上競技選手レオ＝ペッカ・タハティの写真が出展されました。



左上：ミューラ・ウェスティン「ミシカル（神話）」展が4～5月に東京都立中央図書館で開催されました。（写真：フィンランドセンター）
 左下：写真展「Spirit in Motion for Diversity & Inclusion」が東京都議会議事堂内で開催されました。（写真：フィンランドセンター）
 右：渡邊大志准教授（早稲田大学）の展覧会のオープニング・セレモニーがメッツァ・パビリオンで開かれました。（写真：フィンランドセンター）

当センターでは、渡邊大志准教授（早稲田大学）の建築関連の展覧会をメッツァ・パビリオンで開催しました。展覧会のオープニング・セレモニーでは、渡邊准教授へのJFDA（日本フィンランドデザイン協会）賞の授賞を、当センター所長アンナ＝マリア・ウィルヤネンの手で行いました。本展「ひとつなぎの建築 Unity Architecture in Finland and Japan -3Projects, 3Exhibitions, 18Objects-」は、東京都における感染症の拡大状況を受けて一般公開ができませんでしたが、会場をオンラインに移しており、現在もビデオツアーの視聴が可能です。展覧会は東京のあとヘルシンキへ巡回し、「Nation on Sorrow」展としてアアルト大学ラーニングセンターでの展示が行われました。本展は2022年にドイツのベルリンとヴァイマルへも巡回する予定です。

当センターは以下の展覧会への後援や協力を行いました。

世田谷美術館（東京都）で開催され、同年中に兵庫県立美術館（神戸市）へ巡回した「アイノとアルヴァ 二人のアアルト フィンランドー建築・デザインの神話」展。

北九州市立美術館（福岡県）、兵庫陶芸美術館（兵庫県）、Bunkamuraザ・ミュージアム（東京都）で開催された「ザ・フィンランドデザイン展ー自然が宿るライフスタイルー」。

パナソニック汐留美術館（東京都）といわき市立美術館（福島県）で開催された「サーリネンとフィンランドの美しい建築」展。本展の東京での開催に連動して、研究者ティモ・トゥオミ氏がサーリネンの生涯と作品について、また当センター所長アンナ＝マリア・ウィルヤネンが1900年パリ万国博覧会フィンランド館について、それぞれ講演を行いました。

東京で開催されたフィンランド映画祭を例年通り後援しました。

ヨーロッパ文芸フェスティバルには、フィンランドを代表して作家サミ・ヒルヴォ氏を当センターが招聘。加えて、作家ミア・カンキマキ氏がフェスティバルのクロージング・イベントに参加し、日本語に翻訳された自著について、パトリシア・フロア駐日欧州連合大使、当センター所長アンナ＝マリア・ウィルヤネンと対話しました。

「Europe Readr」プロジェクトのパネルディスカッションでは、フィンランドを代表して、作家・イラストレーターのサンナ・ペリッショニ氏の作品が紹介されました。また当センターは、スロヴェニア大使館、EUNIC JAPAN（欧州連合文化機関）による「Europe Readr」地域プロジェクトにも参加。このプロジェクトでは、東京都北千住のコミュニティスペースに、だれでも利用できる屋外図書館が設置されました。



2021年10月、「Europe Readr」地域プロジェクトの始動を祝うセレモニーの様子（東京都北千住）。（写真：フィンランドセンター）

当センターはインターネット上でも網羅的なプログラムを継続しています。春には、フィンランド美術の黄金期に活躍したさまざまな画家を紹介する、全9回のオンライン連続講座を開講しました。

当センターでは、アーティストのマーリア・ヴィルツカラ氏ならびにミッラ・ヴァーハテラ氏によるアーティスト・トークを、オンラインで開催しました。両氏とも北アルプス国際芸術祭（長野県大町市）に作品を出展しましたが、来日は移動制限のため実現しませんでした。

オンラインセミナー「フィンランドより、持続可能なデザイン」を、Art Promotion Center Finland、アアルト大学、Ornamo、フィンランド・デザイン・ミュージアムなどと共同で開催しました。プロジェクトのコーディネイトはPolku Consultingが手掛けました。本セミナーでは、テキスタイルデザイナー・オブ・ザ・イヤーに輝いたエルヤ・ヒルヴィ氏、シューズデザイナーのミンナ・パリッカ氏、建築家ベッカ・ヘリン氏などが登壇しました。

当センターはThe Children and Youth Foundationの「Read Hour（読書アワー）」キャンペーンに参加し、日本の聴衆向けにトーベ・ヤンソンの作品を朗読しました。また、当センター所長アンナ＝マリア・ウィルヤネンによるフィンランドのバーチャルツアーを3回（マリエハムン1回、ヘルシンキ2回）実施しました。

当センターを含むフィンランドの文化・学術機関の相互協力により実現した「Together Alone」プロジェクトは、2020年から継続しています。「Together Alone 2.0」の公募を通じて、さまざまな芸術分野から8件の新規企画が選ばれ、選考結果は2021年末にインターネット上で発表されました。これらの企画は、2022年の春にハナサーリ（ヘルシンキ）で開催の「Together Alone 2.0 フェスティバル」で披露されます。本プロジェクトは2023年も継続され、この年にはフィンランドのすべての文化・学術機関の協働で「Together Again フェスティバル」を開催する予定です。

交流

日本への入国制限の厳しさから、TelepART助成金の支給は2021年には実施できませんでした。

「バイオアート&サイエンス」レジデンス活動は、フィンランドからのリモートにより実現しました。2020年のレジデンス滞在者に選ばれたヨハンナ・ロトゥコ氏が、一般公開のアーティスト・トークをBio Club Tokyoのウィークリー・ミーティングの一環として行い、自身のレジデンス期間の締め括りとなりました。

2020年の信楽の陶芸レジデンス滞在者として選ばれていたエーミル・リュウティッカ氏の滞在は再び延期され、2022年の予定になりました。その他のレジデンスについては、移動制限のため滞在アーティストの選出は実施されていません。

高等教育分野における協力

感染症の世界的流行にもかかわらず、フィンランドの教育システムやフィンランドへの留学は引き続き関心を集めています。本年度、フィンランドセンターの関連イベントへの参加者数ならびに問い合わせ数は、いずれも前年比3倍に増加しました。当センターが開催した教育関係イベントへの参加者数は、合計で2691名を数えました。

オンラインで実施したウェブセミナー、学生向けフェア、その他イベントは、日本国外も視野に入れ、対象者をより広範囲に設定しました。当センターではまた、各種の催しを実施することでフィンランドの教育の日本への輸出を促進。例として、EduTech 教育輸出イベントや、「スクール・オン・ザ・ムーブ」パイロット・プログラムが挙げられます。

高等教育に関するオンラインセミナー

本年度は、フィンランドの高等教育を紹介するオンラインセミナーを8回開催しました。セミナーでは、フィンランドで学ぶということ、出願の手順と条件、カリキュラムについて情報を提供しています。セミナーには日本人のフィンランド留学経験者も登壇し、自らの体験を語ったほか、フィンランドからも次に示すような高等教育

機関からの登壇を得ました：ハーガヘリア応用科学大学、ユヴァスキュラ応用科学大学、サヴォニア応用科学大学、タンペレ大学、タンペレ応用科学大学、カヤーニ応用科学大学、ハメ応用科学大学、オウル応用科学大学ほか。

セミナーの参加者内訳は、大学生53%、大卒社会人40%、高校生以下7%でした。参加者アンケートでは回答者の98%が、非常によかった、優れた情報チャンネルだったとセミナーを評価しています。

留学フェア

当センターは、2月、9月、12月に開催されたJASSO（日本学生支援機構）海外留学オンラインフェアに参加しました。また、JASSOが初めて北欧留学をテーマに企画したセミナーにも参加しました。

10月にオンラインで開催された欧州留学フェア（EHEF）では、当センターはフィンランド留学の可能性について紹介し、また、ドイツ、ウクライナ、フランスへの留学経験者とのパネルディスカッションにも参加しました。

当センターは招聘に応じ、東京を離れた各地でもフィンランドの高等教育やライフスタイルに関する講演を行いました。講演先の例は、名古屋外国語大学（愛知県）、都留文科大学（山梨県）の学内フェア、文部科学省が主導する「トビタテ！留学JAPAN」ネットワークのイベント、筑波大学主催のJANET（在欧日本学術拠点ネットワーク）フォーラム、北海道による各種セミナーなどです。



上：読売新聞に掲載された「スクール・オン・ザ・ムーブ」プログラムの紹介記事。（写真：フィンランドセンター）
 下：フィンランド語講座はオンラインで継続。（写真：フィンランドセンター）

日本の大学への訪問「ロードショー」

当センターは2018年に開始した「ロードショー」を継続。目的は、フィンランドと日本の高等教育機関を結びつけ、当事者間の対話を促進し、フィンランドの高等教育機関への留学の可能性に関する情報を提供することです。2021年には、東京と関西に所在する11の大学を「ロードショー」で訪問しました。訪問先は、成城大学、武蔵大学、東京女子大学、東京理科大学、近畿大学、立命館大学などです。

日本の大学は、学生・研究者の交流の促進や、フィンランドの大学との新たな二者間協力協定の締結に関心を寄せています。当センターは情報を提供し、フィンランドと日本の橋渡し役として活動しています。

「スクール・オン・ザ・ムーブ」パイロット・プログラム

当センターは、「スクール・オン・ザ・ムーブ」パイロット・プログラムにフィンランド教育文化省ならびにLIKES（身体活動健康研究センター）とともに引き続き参画しており、日本初となるパイロット・プログラムを開始しました。パイロット校として、江戸川区立篠崎小学校（東京都）、私立サレジオ学院中学校・高等学校（神奈川県）、佐賀市立小中一貫校富士校中学部（佐賀県）の3校が参加。各校とも授業に2～4週の身体活動を導入し、合計で987名の児童生徒がパイロット・プログラムに参加しました。

フィンランド語講座

本年度は5つのフィンランド語講座（初級、上級）を開講しました。講師は橋本ライヤ、奥田ライヤの両氏が務めました。



メッツァ・パピリオンで開催された編み物マラソンの様子。
(写真：フィンランドセンター)



編み物クラブ（オンペルセウラ）

フィンランドセンターの「編み物クラブ（オンペルセウラ）」は人気の月例イベントで、大好評のため春には月2回の開催となりました。

回ごとにテーマが設定され、参加者は編み物をしながら、役立つ情報を交換したり、編み物の最新トレンドについて語り合ったりしました。編み物クラブではコーヒーとフィンランド伝統のおいしいものがふるまわれるのが恒例で、さらには編みながらヨガを体験したことも！本年度の編み物クラブは21回、編み物マラソン（所要5時間）は3回、それぞれ開催され、合計1020名の熱心な参加者を得ました。

編み物クラブで使用する毛糸、編み棒、その他資材はすべて、長年にわたり当センターと協力関係にあるノヴィタ社（フィンランド）よりご提供いただいております。





上：スウェーデン系フィンランド人文化ウィークの最後を飾ったザリガニパーティーを楽しむ参加者たち。（写真：フィンランドセンター）
左：（上から順に）グリーン・ライト・ディストリクト、ヨハンナ・グリクセン氏、テド・ウルホ氏（写真：フィンランドセンター、テド・ウルホ）



Hallå Tokyo! スウェーデン系 フィンランド人文化ウィーク

4回目を迎えた「Hallå Tokyo! スウェーデン系フィンランド人文化ウィーク」は、「人々と影響」をテーマに5日間連続で開催されました。文化ウィークは、トランスナショナル・ガバナンス・スクール教授、アレクサンデル・ストゥブ氏のインタビューで力強く開幕。インタビューの中でストゥブ教授は、スウェーデン語とスウェーデン系フィンランド人の文化が自身の人生に与えた影響について語りました。続く火曜日には、スウェーデン系フィンランド人のバンドであるグリーン・ライト・ディストリクトのコンサートを開催。Zoom配信により、東京とヘルシンキでの同時開催が実現しました。

水曜日の夜のプログラムでは、テキスタイルデザイナーのヨハンナ・グリクセン氏が、自らの芸術家としてのアイデンティティや、自身のテキスタイル作品について語り、熱心な日本人参加者たちからの質問の数々に答えていました。木曜日には、シンクタンクAgendaの統括部長を務めるテド・ウルホ氏が、スウェーデン系フィンランド人のアイデンティティの歴史などについてトークを行いました。スウェーデン系フィンランド人の文化の豊かさを紹介する文化ウィーク、そのハイライトは恒例のザリガニパーティーで、参加チケットは瞬間に完売となりました。パーティーの開催に当たっては、参加者の安全を確保するため特別な対策が必要でしたが、この点においても、楽しい雰囲気損なうことなく成功を収めました。



写真：フィンランドセンター

フィンランドセンター職員紹介

所長

アンナ＝マリア・ウィルヤネン

プロジェクトマネージャー

パシ・ヤルヴィネン

アカデミック・リサーチ・

コーディネーター

原あかり

オフィスマネージャー

岡本留実

研修生

ラウリ・セロネン

(2021年1月1日～3月31日)

イェンナ・タヴァスティ

(2021年2月1日～11月30日)

セバスチャン・サンドストロム

(2021年8月15日～12月31日)

謝辞

フィンランドセンターは、以下の皆様にご支援・ご協力をいただいています。

Opetus- ja kulttuuriministeriö



BUSINESS
FINLAND

fccj



NOVITA

フィンランドセンター財団

フィンランドセンター財団は、1998年に設立されたフィンランドの非営利団体です。財団のミッションは、憲章に則り、フィンランドの文化、学術、高等教育、技術、経済に関する理解を深めるとともに、これらの分野における日本とフィンランドの協力を促進することです。フィンランドセンターは、特に学術、文化、高等教育の各分野で、両国における発展と協力のニーズを特定・予測し、互いに協力パートナー候補を見つけるための支援を行います。フィンランドセンター財団は東京のフィンランドセンターを維持しています。

2021年のフィンランドセンター（日本）の理事会員は以下の通りです。

ピルヨ・ヒーデンマー（理事長）
アンティ・アハラヴァ（副理事長）
ニクラス・サンドラー
ヨルマ・マッティネン
マルヤ・サカリ
オッリ・シルベン

フィンランドセンター財団の財団委員長はティーア・サーリネンが務めました。

フィンランドセンター代表団

代表団の会員数は29。議長はヨルマ・マッティネン教授が務めました。会員は、高等教育機関、学術・研究機関、産業界、企業を代表する次のメンバーです。

Aalto-yliopisto
Hanken Svenska handelshögskolan
Helsingin yliopisto
Itä-Suomen yliopisto
Jyväskylän yliopisto
Lapin yliopisto
LUT-yliopisto
Oulun yliopisto
Suomen Akatemia
Taideyliopisto
Tampereen yliopisto
Tieteellisten seurain valtuuskunta
Turun yliopisto
Vaasan yliopisto
Teknologian tutkimuskeskus VTT
Åbo Akademi

Kemira Chemicals Oy
Nokia Oyj
Outokumpu Oyj
Tallink Silja Oy
Designmuseo

Suomen Arkkitehtuuriliitto –
Finlands Arkitektförbund ry SAFA
Suomen Kirjailijaliitto ry
Suomen Kulttuurirahasto
Taiteen edistämiskeskus

Japan Finland Society
Suomalais-japanilainen Yhdistys ry

Business Finland (Finpro ja Tekes)
Helsingin kaupunki



Finnish Institute in Japan
フィンランドセンター

フィンランドセンター

〒106-8561

東京都港区南麻布3-5-39

メール：info@finstitute.jp

電話：+81-(0)3-5447-6037

www.finstitute.jp



@finstitutejapan



@finstitutejapan



@finstitutejp